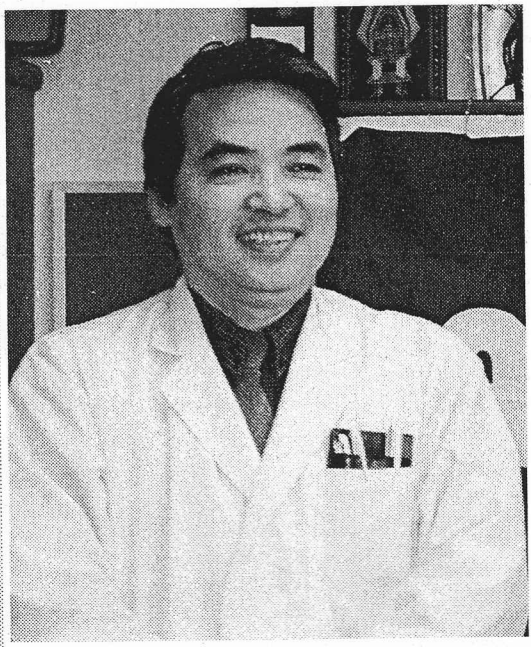
AMDA代表

# 菅波　茂さん 54

interview OKAYAMA

明日を探る

# 戦争犠牲者の心癒す



――AMDA創設以前から抱いていた夢を実現していると伺ったのですが。

太平洋戦争で犠牲になった人々に対する「魂と医療のプログラム（ASMP）」です。毎年、激戦地で慰霊祭を開催し、旧日本兵や現地の人など、すべての戦争犠牲者の魂を弔いながら、簡易診療所を設置して現地に残る遺族らに継続した医療サービスを提供しています。

――意義は。

二十世紀は共産主義、資本主義などの〈大きな思想〉の下で〈小さな心〉が犠牲になった時代でした。戦死した日本兵三百万人の遺骨はアジア各地に埋まったままで忘れ去られ、戦争に巻き込まれた現地の人やその家族のことも、今の日本はすっかり忘れていますね。この計画は国籍に関係なく、戦争によって犠牲になったすべての人々への癒しの事業なんです。

――診療所の設置だけではなく、なぜ「慰霊祭」という宗教的儀式を伴うのですか。

現地の人の精神的背景を尊重し、犠牲者の魂や関係者に「あなたの事を忘れていない」という意思を伝えるためです。日本以外の国では、宗教が人々の考えに非常に大きなウエートを占めていますから、ほかの文化の人と一緒に働こうとするなら、その人の宗教観を大切にしなければなりません。

――なぜ、このような活動を行うのでしょう。

「かつての前線」で活動している私たちは、決して太平洋戦争に無関心ではいられないからです。一九九五年のベトナム洪水では、二千人の旧日本兵と二万人のベトナム人が餓死した場所で支援活動を行いました。サハリン大地震の現地では、戦前から移住している日本人が多く残っており、「二級市民」として扱われていましたが、彼らからは「AMDAのおかげで、我々の立場が良くなった」と喜んでもらえました。アジア各地のAMDA支部のメンバーも家族に犠牲者がいたりします。

――激戦地では、日本に対する反発もまだ強く残っているのでは。

昨年末に開いた第一回目のフィリピンでの慰霊祭には私も参加しましたが、会場となったマニラ市のカトリック教会では、下見をした日、現地のおばあさんたちにジロリとにらまれ、ヒヤリとしたこともありました。反日感情から何が起こるか分からないと心配しましたが、当日はどこの慰霊祭も平和のうちに、厳かに行われました。

――このプログラムは、菅波さん個人の思いが強く込められているのですか。

十七歳のころ見た、南太平洋の浜辺で当時の私と同じくらいの若い日本兵がうつぶせで死んでいる第二次世界大戦中の写真が、今でも強く印象に残っています。私は戦後生まれですが、ASMPはその時からの三十年来の願いでした。戦争の記憶は、子や孫まで百年続きます。今はまだ五十年しかたっていません。少なくともあと五十年はASMPは続けなければなりません。

（岡山支局　阿利　明美）

**メモ**　一九四六年、広島県神辺町生まれ。自ら提唱して八四年にAMDA（アジア医師連絡協議会）を設立。AMDAは設立十七年目で、世界中に約三十支部、約十五の駐在所を持つ。会員は国内を中心に約千五百人、登録している医療スタッフは約二百人。岡山市楢津の事務局には二十六人の常駐職員がいる。国連登録の非政府組織（NGO）として、紛争地や災害被災地に緊急医療チームを派遣する緊急救援活動や、発展途上国などに継続的な医療支援プロジェクトを行っている。